

力学の見どころ — 速度と運動量の双対性を中心に

北野 正雄

京都大学, 応用科学研究所, 大阪大学 QIQB

第 11 回 QUATUO 研究会@岡山大学
2025 年 1 月 11-12 日

(もくじ)

1. はじめに

2. 双対空間

3. Dirac と デュアル

4. 力学における双対

はじめに — 本の紹介

ライブラリ **理学・工学系** 物理学講義ノート 佐藤文隆, 北野正雄 (共編)
サイエンス社刊 (2017.3-)

ライブラリ理学・工学系物理学講義ノート 2
カ 学
講義ノート
基礎から解析力学入門へ
北野 正雄 著



▶ 「カ学」2024年12月25日刊行

▶ サポートページに付録

付録 A 単位系

付録 B 双対構造

付録 C Python コード

ライブラリ理学・工学系物理学講義ノート 3
振動・波動・光
講義ノート
引藤 隆士・中西 俊博 共著



ライブラリ理学・工学系物理学講義ノート 4
熱・統計力学
講義ノート
森崎 雅夫 著



ライブラリ理学・工学系物理学講義ノート 5
電磁気学
講義ノート
森田 正夫 著



ライブラリ理学・工学系物理学講義ノート 6
量子力学
講義ノート
前期量子論から量子もつれまで
竹内 繁樹 著



ライブラリ理学・工学系物理学講義ノート 7
物理数学
講義ノート
山口 哲 著



力学の見どころ

- ▶ (教養時代以来の) 力学を勉強し直して, いろいろな気づきがあった.
- ▶ 電磁気学も量子力学も力学をモデルにして構築されており復習の意味は大いにある.
- ▶ ここでは力学における「双対」について話をしたい.

(もくじ)

1. はじめに

2. 双対空間

3. Dirac と デュアル

4. 力学における双対

みなさんへの質問

線形代数学で「双対空間」を学びましたか？

双対空間の簡単な歴史

- ▶ 双対 (ベクトル) は関数空間 (無限次元) 上の汎関数として, その重要性が徐々に認識されるようになった (F. Riesz, 1909).

$$A[f] = \int_X f(x) \, d\mu_A(x)$$

- ▶ 汎関数がなす線形空間の有用性 (e.g. 超関数 = 急減少関数の汎関数)
- ▶ しかし, 有限次元では, “... before 1930 nobody had a correct conception of duality between finite dimensional vector spaces;” (by Dieudonne in History of Functional Analysis)
- ▶ 双対 (dual) という用語は Bourbaki による (~ 1938).

大学の「線形代数」で取り上げられる機会は少ない。「物理学」でも共通の普遍的概念としては扱われていない。

双対空間の定義

- ▶ 体 K (\mathbb{R}, \mathbb{C} など) 上の線形空間 V に対して, V から K への線形写像 ϕ を考える.

$$\phi(x + y) = \phi(x) + \phi(y), \quad \phi(\alpha x) = \alpha\phi(x).$$

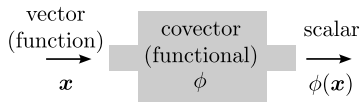
- ▶ 線形写像全体がつくる集合: V^*
- ▶ $\phi, \psi \in V^* \Rightarrow \phi + \psi \in V^*, \quad \alpha\phi \in V^*$, つまり, V^* は K 上の線形空間である. V の双対空間 (dual space) とよぶ.
- ▶ 双対空間の要素は双対ベクトル, コベクトル, 1 形式, 汎関数, ...
- ▶ $x \in V, \phi \in V^*$ に対して $\phi(x)$ を $\langle \phi, x \rangle$ と書き, 双対ペアリング, 内積などとよぶ. テキストでは $\phi \mid x$ と書いた.
- ▶ 有限次元の場合, $\dim V^* = \dim V, (V^*)^* \sim V$. (双対のゆえん.)

推しの双対が流行らない理由

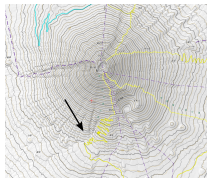
- ▶ イメージ・機能の多様性
- ▶ 内部積と内積が混同される. 実際, 後者で代用できる場合 (計量つき空間) も多い.
 - ユークリッド空間・デカルト座標に慣れすぎている
- ▶ 関数型プログラミング (Lisp ... Haskell) の敷居の高さに類似;
 - 「関数が first class object として変数と同様に使える。」
 - 「線形写像が線形空間の要素としてベクトルのように扱える。」
- ▶ ブラケットと内積の混同 — 折衷記法 $\langle \hat{A}\phi|\psi\rangle$
- ▶ Geometrical Algebra (GA) では双対を意識的に排除しているように思える.
- ▶ テンソル記法 (上下添字) に内包されてしまっている.

双対ベクトルのイメージ

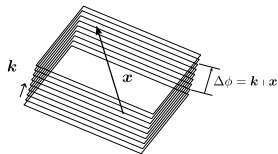
▶ 線形ブラックボックス



▶ 等高線・等圧線



▶ 波数ベクトル



双対ベクトル (コベクトル) の表現

- ▶ 線形ブラックボックス ϕ にベクトル $x = x_1 e_1 + \cdots + x_n e_n$ を入力;

$$\begin{aligned}
 \phi(x) &= \phi(e_1 x_1 + \cdots + e_n x_n) \\
 &= \phi(e_1) x_1 + \cdots + \phi(e_n) x_n & p_i &:= \phi(e_i) \\
 &= p_1 x_1 + \cdots + p_n x_n \\
 &= \begin{bmatrix} p_1 & \cdots & p_n \end{bmatrix} \begin{bmatrix} x_1 \\ \vdots \\ x_n \end{bmatrix} = \boldsymbol{p} \mid \boldsymbol{x}
 \end{aligned}$$

2つのベクトルの内積と思わずに,
 ヨコベクトルとタテベクトルの行列積と思う

(もくじ)

1. はじめに

2. 双対空間

3. Dirac と デュアル

4. 力学における双対

Dirac: The Principles of Quantum Mechanics

- ▶ 1930 1st edition (~ 27 歳)
ベクトルを ψ , 反線形ベクトルを ϕ で表した.
- ▶ 1935 2nd edition
- ▶ Math. Proc. Cambridge Phil. Soc. **35**, 416 (1939)
“A new notation for quantum mechanics”
- ▶ 1947 3rd edition **ブラケット記法を採用**
 $\psi \rightarrow |\psi\rangle, \phi \rightarrow \langle\psi|$
- ▶ 1958 4th edition
- ▶ 1967 Revised 4th edition

日本語版は第 2 版から.

仁科芳雄, 朝永振一郎, 小林稔, 玉木英彦 (訳): 「量子力学」 (岩波書店, 1942)
第 1 版翻訳中に原著第 2 版の完成の情報が著者から届く.

北野: 数理科学 1 月号 2025 年

Dirac は dual を知っていた！

- ▶ Whenever we have a set of vectors in any mathematical theory, we can always set up a second set of vectors, which **mathematicians call the dual vectors**. (Dirac, *The Principles of Quantum Mechanics* 3rd ed., Sec. 6)

知ってただけでなく、量子論の定式化に不可欠であることを認識していた。「内積より双対」

ブラケット記法のむずかしさ

- ▶ V, V^* の間の (暗黙の) 対応関係

$$\langle \psi | \quad \Leftrightarrow \quad | \psi \rangle$$

この関係は内積を定義する. $(|\phi\rangle, |\psi\rangle) := \langle \phi | \psi \rangle$

- ▶ 共役演算子の定義

$$\forall \psi. \quad \langle \psi | \hat{A}^\dagger \quad \Leftrightarrow \quad \hat{A} | \psi \rangle$$

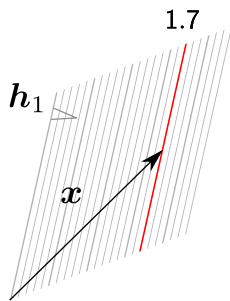
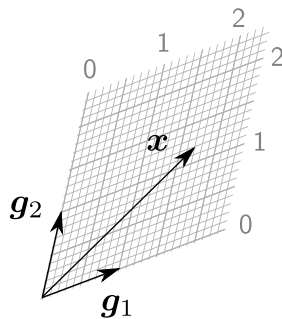
- ▶ よくある間違い

$$\times \quad \forall \phi, \psi. \quad (\langle \phi | \hat{A}^\dagger) | \psi \rangle = \langle \phi | (\hat{A} | \psi \rangle)$$

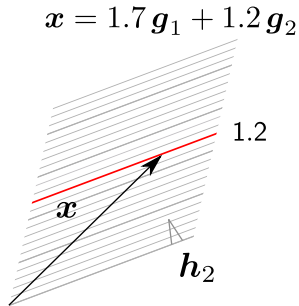
$$\bigcirc \quad \forall \phi, \psi. \quad \langle \phi | \hat{A}^\dagger | \psi \rangle = \langle \psi | \hat{A} | \phi \rangle$$

内積記法での定義 $(\hat{A}^\dagger | \phi \rangle, | \psi \rangle) = (| \phi \rangle, \hat{A} | \psi \rangle)$ に引っ張られている.

双対の幾何学的イメージ



$$h_1 \mid x = 1.7$$



$$h_2 \mid x = 1.2$$

非正規/非直交基底のためのグラフ用紙

双対基底

線形空間 V に正規直交基底 e_1, \dots, e_n がとれない場合

- ▶ V の基底 $g_1, \dots, g_n \in V$ に対し, V^* の基底 $h_1, \dots, h_n \in V^*$ を

$$h_i(g_j) = \delta_{ij}$$

を満たすようにとる — 「双対基底」

- ▶ ベクトルごとの関係ではなく, 基底全体同士の関係.

$$h_1 = h_1(g_1, \dots, g_n), \quad \dots$$

- ▶ (例) 3次元格子ベクトル a_j , 逆格子ベクトル b_i

$$b_i \cdot a_j = \delta_{ij}$$

$$\text{具体的には } b_1 = \frac{a_2 \times a_3}{a_1 \cdot (a_2 \times a_3)}, \quad \dots$$

変換則

- ▶ V の基底を取り替える

$$\bar{g}_j = \sum_l g_l V_{lj}$$

- ▶ 双対基底 $(h_i \mid g_j = \delta_{ij})$ の変換則は

$$\bar{h}_i = \sum_k V_{ik}^{-1} h_k \quad \text{反変}$$

- ▶ ベクトル $x \in V$ とコベクトル $a \in V^*$ の展開

$$x = \sum_j g_j x_j = \sum_j \bar{g}_j \bar{x}_j \quad a = \sum_i a_i h_i = \sum_i \bar{a}_i \bar{h}_i$$

- ▶ 成分の変換則

$$\bar{x}_j = \sum_i V_{ji}^{-1} x_i \quad \text{反変}, \quad \bar{a}_j = \sum_i a_i V_{ij} \quad \text{共変}$$

計量

- ▶ V と V^* の要素の間に普遍的な関係性はない. 例えば関係

$$\boldsymbol{x} = \sum_i g_i x_i \quad \Leftrightarrow \quad \boldsymbol{x}^* = \sum_i x_i h_i$$

は基底の選び方に依存する.

- ▶ V と V^* の要素の間に 1 対 1 の関係を設定することは, V に内積を定義することと等価.

(もくじ)

1. はじめに
2. 双対空間
3. Dirac と デュアル
4. 力学における双対

運動方程式の構造

▶ 通常の間

$$ma = f \quad \text{あるいは} \quad m \frac{d^2 r}{dt^2} = f$$

— 簡単化しすぎ.

▶ 構造が見えるように書き直すと,

$$\frac{dr}{dt} = v$$

速度の定義

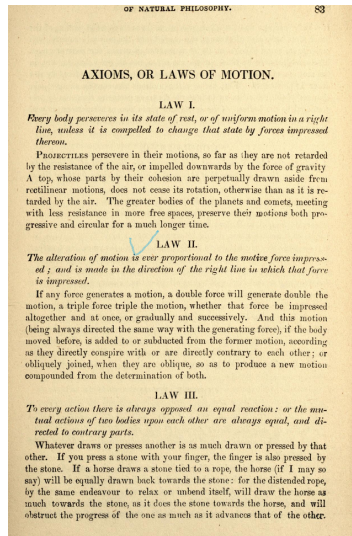
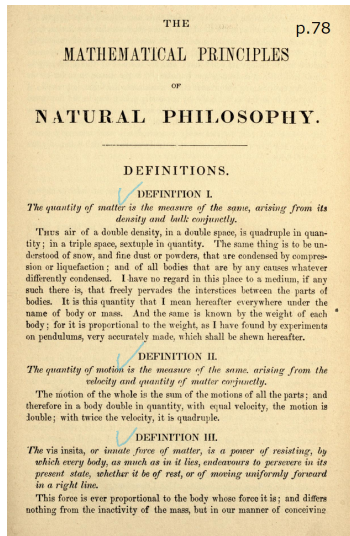
$$p = mv$$

運動量と速度の関係

$$\frac{dp}{dt} = f$$

第 2 法則

Principia



プリンキピア

定義 I 物質の量とは, その物質の密度と容積の相乗積をもって測られるものである.

$$m = \rho_s V \quad \text{質量の定義}$$

定義 II 運動の量とは, 速度と物質の量の相乗積をもって測られるものである.

$$p = mv \quad \text{運動量の定義}$$

法則 II 運動の変化は加えられた動力に比例し, かつその力が働いた直線の方に沿って行われる.

$$\frac{dp}{dt} = f \quad \text{いわゆる第 2 法則}$$

ニュートンは丁寧に書いている.

運動方程式の構造化のメリット

- ▶ 1 階の (連立) 微分方程式 — 数値計算に適している
- ▶ 状態変数 (r , v or p) が明確
- ▶ 量の間関係性が見易い
- ▶ 正準方程式との親和性

電磁方程式との比較

$$\frac{\partial \mathbf{B}}{\partial t} + \text{curl } \mathbf{E} = 0, \quad \text{div } \mathbf{B} = 0$$

力場

$$\mathbf{D} = \varepsilon_0 \mathbf{E}, \quad \mathbf{H} = \mu_0^{-1} \mathbf{B}$$

構成方程式

$$\frac{\partial \mathbf{D}}{\partial t} - \text{curl } \mathbf{H} = -\mathbf{J}, \quad \text{div } \mathbf{D} = \varrho$$

源場

構成方程式が最も非自明な式. $\mathbf{p} = m\mathbf{v}$ も.

速度 vs 運動量

- ▶ 両者は似てはいるが、比例関係 $p = mv$ では済まない違いを秘めている。 — 両者の区別が力学の肝

	速度 v	運動量 p
性格	可視的 $\frac{d\mathbf{x}}{dt}$	不可視的 $\int \mathbf{f} dt$
数学的帰属	接ベクトル $\in T_p M$	余接ベクトル $\in T_p^* M$
波動対応物	群速度 $\frac{\partial \omega}{\partial \mathbf{k}}$	位相速度 $\frac{\omega}{k} \frac{\mathbf{k}}{k}$

運動エネルギーと運動余エネルギー

- ▶ 微小仕事 $\Delta W = \mathbf{f} \mid \Delta \mathbf{r}$ に運動方程式 $\dot{\mathbf{p}} = \mathbf{f}$ を代入すると

$$\Delta W = \mathbf{f} \mid \Delta \mathbf{r} = \mathbf{f} \mid (\mathbf{v} \Delta t) = (\mathbf{f} \Delta t) \mid \mathbf{v} = \Delta \mathbf{p} \mid \mathbf{v}$$

- ▶ 積分すると

$$W = \boxed{T(\mathbf{p}) := \int_0^{\mathbf{p}} \mathrm{d}\mathbf{p}' \mid \mathbf{v}(\mathbf{p}')} \quad \text{運動エネルギー}$$

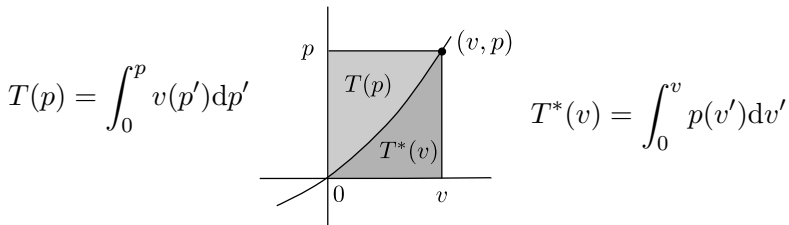
- ▶ チェーン則 $\Delta \mathbf{p} \mid \mathbf{v} = \Delta(\mathbf{p} \mid \mathbf{v}) - \mathbf{p} \mid \mathbf{v}$ を用いて積分すると,

$$W = \mathbf{p} \mid \mathbf{v} - \int_0^{\mathbf{v}} \mathbf{p}(\mathbf{v}') \mid \mathrm{d}\mathbf{v}' = \mathbf{p} \mid \mathbf{v} - T^*(\mathbf{v})$$

ここで,

$$\boxed{T^*(\mathbf{v}) := \int_0^{\mathbf{v}} \mathbf{p}(\mathbf{v}') \mid \mathrm{d}\mathbf{v}'} \quad \text{運動余エネルギー}$$

ルジャンドル変換 — 1次元の場合



- ▶ $T(p)$ と $T^*(v)$ はルジャンドル双対の関係

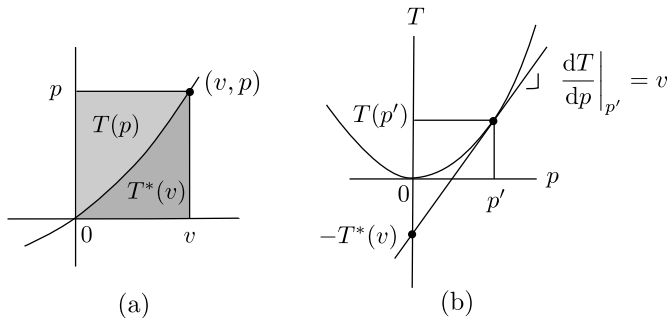
$$T^*(v) = p(v)v - T(p(v)) \quad \leftrightarrow \quad T(p) = p v(p) - T^*(v(p))$$

- ▶ 線形関係 $p = mv$ の場合

$$T^*(v) = \frac{mv^2}{2} = T(mv) \quad \leftrightarrow \quad T(p) = \frac{p^2}{2m} = T^*(p/m)$$

— 符号反転が見えなくなる

通常のリジャンドル変換の説明図との比較



通常，リジャンドル変換は図 (b) のように $T(p)$ (あるいは $T^*(v)$) の接線を用いて説明される。

運動余エネルギー $T^*(v)$ の役割

- ▶ (一般化) 運動量を生成

$$p = \frac{\partial T^*(v)}{\partial v} \quad T^* \text{ は運動状態のポテンシャル}$$

可視的な v から不可視的な p を生成する.

- ▶ 運動方程式 $\dot{p} = F$ が以下の形に書ける.

$$\frac{d}{dt} \frac{\partial T^*}{\partial v} = F$$

- ▶ 力がポテンシャルから導かれる場合, $F = -\partial V(r)/\partial r$ には

$$\frac{d}{dt} \frac{\partial L}{\partial v} - \frac{\partial L}{\partial r} = 0, \quad L(v, r) = T^*(v) - V(r)$$

ラグランジアンとハミルトニアン

▶ ラグランジアン

$$L(\boldsymbol{v}, \boldsymbol{r}) = T^*(\boldsymbol{v}) - V(\boldsymbol{r})$$

▶ ハミルトニアン

$$H(\boldsymbol{p}, \boldsymbol{r}) = T(\boldsymbol{p}) + V(\boldsymbol{r})$$

▶ ルジャンドル双対の関係

$$L(\boldsymbol{v}, \boldsymbol{r}) \quad \leftrightarrow \quad H(\boldsymbol{p}, \boldsymbol{r})$$

$V(\boldsymbol{r})$ は $(\boldsymbol{v}, \boldsymbol{p})$ を含まないので単なるパラメータ

▶ 符号反転の影響は $V(\boldsymbol{r})$ に現れている.

運動不定性

- ▶ 運動余エネルギーを

$$\bar{T}^*(\mathbf{v}, \mathbf{r}, t) = T^*(\mathbf{v}) + \frac{d}{dt}\beta(\mathbf{r}, t)$$

で置き換える. β は任意関数.

- ▶ 運動量は影響を受ける.

$$\bar{\mathbf{p}} = \frac{\partial \bar{T}^*}{\partial \mathbf{v}} = \mathbf{p} + \frac{\partial}{\partial \mathbf{v}} \left(\frac{\partial \beta}{\partial \mathbf{r}} \frac{d\mathbf{r}}{dt} + \frac{\partial \beta}{\partial t} \right) = \mathbf{p} + \frac{\partial \beta}{\partial \mathbf{r}} \quad \text{ゲージ自由度}$$

- ▶ 運動方程式はゲージ変換の影響を受けない;

$$\frac{d}{dt} \frac{\partial \bar{T}^*}{\partial \mathbf{v}} - \frac{\partial T^*}{\partial \mathbf{r}} = \frac{d\mathbf{p}}{dt} + \cancel{\frac{d}{dt} \frac{\partial \beta}{\partial \mathbf{r}}} - \cancel{\frac{\partial}{\partial \mathbf{r}} \frac{d\beta}{dt}} = \mathbf{F}$$

計算を一部省略した (全微分 d/dt の展開が必要).

変分を使えばより簡単 (ランダウ・リフシッツ: 力学 p. 4)

ガリレイ変換

速度 V で等速運動する系 $\bar{v} = v - V$

▶ 運動余エネルギー

$$\begin{aligned}\bar{T}^*(\bar{v}) &= T^*(v) \\ &= \frac{m}{2} (\bar{v}^2 + 2\bar{v} \cdot V + V^2) \\ &= \frac{m\bar{v}^2}{2} + \frac{d}{dt} \left[m\bar{x} \cdot V + \frac{mV^2}{2}t \right]\end{aligned}$$

▶ カッコ内を無視するかしないかで異なる運動量

$$\bar{p}_1 = m\bar{v} = p - mV$$

$$\bar{p}_2 = m\bar{v} + mV = p$$

(波動関数の波数に関する Landé's paradox)

その他の見どころ



- ▶ 歴史的実験や学生実験的な話題を取り上げた
- ▶ 力学の単位 (kg , N) の歴史的進化
- ▶ 変分法を用いない解析力学 方法 1 (方法 2 は準備中)
- ▶ 非慣性基準系 — 慣性力と見かけの力の区別
- ▶ 計算コード例の公開 (オンライン)